

国語科授業継承研究方法の構造

- 「言語生活」の視点からの試み -

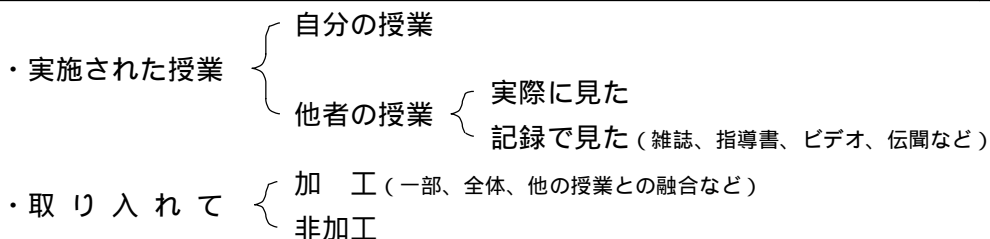
黒川 孝広

キーワード：授業継承、授業研究、言語生活、オブジェクト

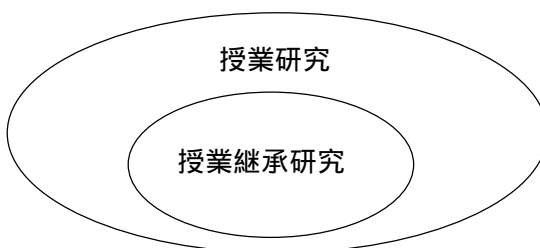
1 授業研究と授業継承研究

1.1 授業継承研究の定義

これから授業を行うために、すでに実施された授業の方法・構成・目標・意識などを取り入れる方法などを研究すること。



1.2 授業継承研究は授業研究の一部として成立する



注) この場合の授業研究は、ある特定の授業研究、重松鷹泰、木原健太郎、砂沢喜代次、広岡亮蔵、上田薫、海後勝雄、オコンなど個別に分けるのではなく、個々の授業研究理論を包括する授業継承研究として位置付ける必要がある。

1.3 例 - 音声言語指導の継承の問題

音声言語指導については歴史的に繰り返し必要性が唱えられている。^{(1) (2)}

- ・明治期 上田万年や保科孝一が音声言語指導の重視を唱えた。
- ・大正期 話し方を中心として音声言語指導の実践をしてきた。
- ・昭和初期 音声言語指導が盛んに行われ、国民学校期でも取り入れられた。

- ・昭和戦後期 「言語生活」の語に象徴され、音声言語指導の重視が唱えられた。
- ・平成期 音声言語指導の重視が唱えられてた。

歴史的に音声言語指導が繰り返され必要とされた理由

- ・国語教育の内容に経済・政治の影響が大きく、国語教育独自の思想が生まれない
- ・文字言語重視と音声言語指導など、国語教育の思潮の波による
- ・音声言語指導の実践が上手く継承されていない
 - ・授業記録の物理的問題
 - 音声言語指導が文字言語で記録されること、ビデオ媒体の普及など
 - ・教師の意識に問題があるか
 - 自己開発意欲の高まり、歴史研究意識の問題

2 「言語生活」の視点

2.1 国語教育での「言語生活」の概念を使用する視点

1 活動の種類の見点

	表現行動	理解行動
文字言語	書く	読む
音声言語	話す	聞く

- ・個別に分類されるが、実際の活動ではこの四活動が交互に、同時に行われる。

例) 教科書の音読、対話、先生の話すをノートに記録する

2 活動の量の視点

- ・日常生活の実態では多くの活動は「聞く、話す」であり、そして「読む」があり、「書く」は少ない。特に、自分の意見表明の「書く」は少ない。

1. (聞く、話す) > 読む > 書く

2. (聞く / 読む) > 話す > 書く

学校生活での活動 { 授業中-----聞く > 読む > 書く > 話す
 休み時間など-----聞く > 話す > (読む、書く)

- ・国語教育の指導では「読む」「書く」「話す」の活動が多く「聞く」は少ない。

3 活動の内容の見点

- ・国語学、言語学での「言語生活」はあらゆる内容を含む。
- ・国語教育では、活動の意義を教育的観点あるいは理想的な発達段階の観点から抽出し、教育目標としての意識から抽出した内容

例) 「聞く」 相手理解のための「聞く」

「読む」 思考力育成や新しい読み方の構築などの「読む」

蔑視、脅迫、批難、差別、けんかの文句などの語や内容は指導しない。

2.2 教育的配慮として選定された国語教育での「言語生活」

- ・国語学・言語学での「言語生活」は学問大系の必要から広い範囲を設定している。

言語を人間の有目的な行為、または、活動と考える立場に立つとき、それは、人間生活の一形態と認められるところから、これを言語生活と言う。言語を、特に人間生活との関連において把握する場合に、言語生活ということが言われる。

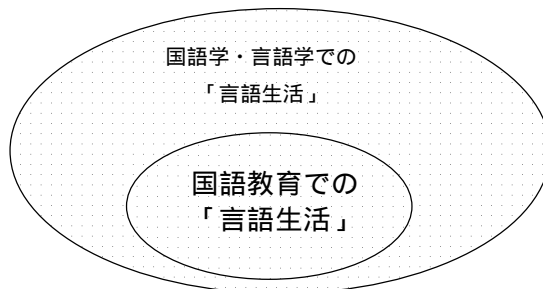
時枝誠記 国語学会『国語学辞典』（1955年 東京堂出版）

- ・国語教育における「言語生活」の視点とは、国語学・言語学での一般論としての「言語生活」の範囲から、活動の意義を教育的観点あるいは理想的な発達段階の観点から抽出し、量や活動の方法などに配慮を加えた内容なのである。

例) 意見表明の「書く」をする 文字言語を中心に扱う「読む」を扱う 朗読をする

国語教育での「言語生活」

実態より教育的配慮から選定された目標としての範囲での言語主体の活動



「言語生活」には、表現行動や理解行動ならず、次の要素を含むものである。

選択運用	伝達手段	話題	環境	言語環境	伝達手段	表現意図	理解	意図
選択運用	言語意識	理解主体と表現主体の関係	社会	文化	制度	言語体系		
言語技術	言語作品	言語芸術	など					

2.3 個別的な範囲を捉える国語教育での「言語生活」

国語教育では、「言語生活」の中の表現行動や理解行動などを全ての人間に通用する範囲で考えるのではなく、授業をする教師が受け持つ生徒の言語習得段階を考察し、指導する「言語生活」の範囲を設定する。よって、国語教育での「言語生活」は、指導する児童・生徒が変わると、指導する「言語生活」の範囲が変わり、指導内容は変化する。

1. 個の言語の使用の状況
2. 地域の言語の使用の状況
3. 教材の言語の使用の状況
4. 教師の言語の使用の状況
5. 教育制度の目標と方法の状況
6. 時代としての状況

この状況の総体を岩淵匡は次のように「言語生活の構造」として整理し、それぞれの個々の状況を「言語生活の実態」としている。

「言語生活の構造」 岩淵匡「言語生活研究の構想」⁽³⁾より

言語環境……（社会的・文化的条件、自然的・地理的条件）＝言語主体が属する言語社会

言語主体……（表現主体、理解主体）

言語主体の内的活動……（表現と理解、言語の選択運用、他主体との相互関係、など）＝内的言語活動

言語主体の外的活動……（伝達媒体、形態、種類、方法、など）＝外的言語活動

言語作品……（文章、談話、など）

言語体系・言語形式……（言語、形式、など）

2.4 教師の視点からの「言語生活」と授業

国語教育での「言語生活」は、継続して指導する児童・生徒の「言語生活」の実態に即して授業の内容を設定することになる。授業を理解するには、授業対象の児童・生徒の「言語生活」の実態を理解する必要がある。しかし、この児童・生徒の「言語生活」の実態は、その授業を担当する教師による視点で設定されたものである。すると、授業を理解するには、教師がどのように児童・生徒の「言語生活」の実態を理解し、どのように授業を構成していたかということ、その教師の視点から判断する必要がある。

3 授業継承研究方法の構造

3.1 授業継承研究方法としての構造モデル化

どの授業研究理論にも適用できる授業継承研究方法をするためには、授業の構造のモデルを設定する必要がある。この構造化の条件は次の3点が考えられる。

- 1 教師の視点で研究する過程が明確になること。
- 2 教師や児童・生徒が変わっても適用できること。
- 3 継承する教師と継承される授業との関係が明確になること。

3.2 構造体 (object) としての授業

先の3点を踏まえて、授業を構造体 (object) と捉え、その中に各要素が含まれると仮定する。

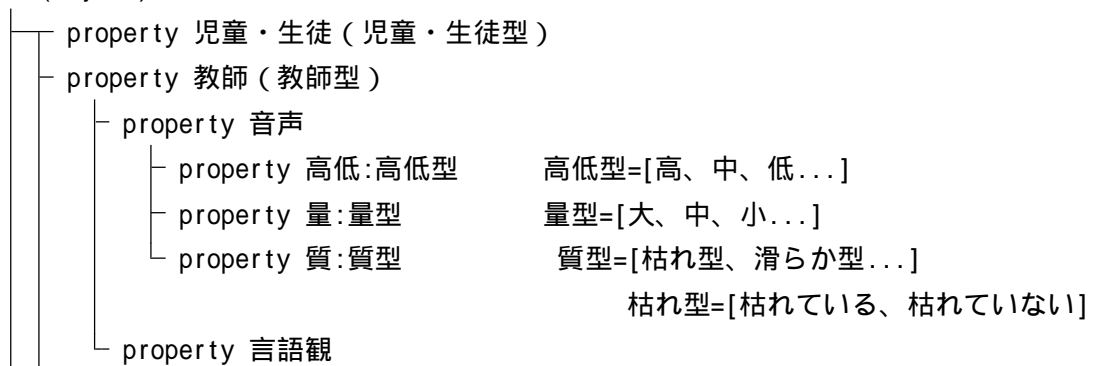
授業要素

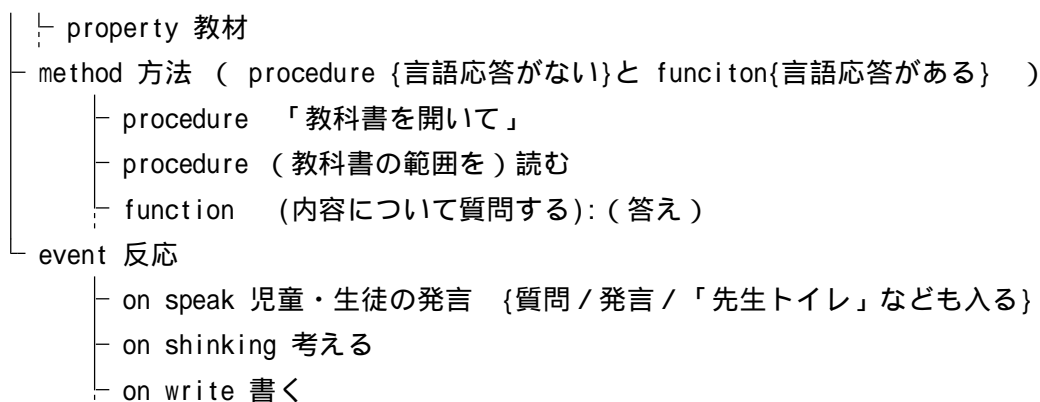
- 1 . 属性 (property) = 「言語生活」の構造 / 実態
 - a . 児童・生徒の状況 {個々の「言語生活」状況や性格、関心など}
 - b . 地域・時代・制度の状況 {学校の季節、天候、気温なども含む}
 - c . 教材の状況 {教材量、内容、文字なども含む}
 - d . 教師の意識・状況 {これを分析することが前提条件となる}
- 2 . 方法 (method) = 教師が意図する教師と児童・生徒の / 教授方法など
 - a . 教師の活動 {事前準備も含む}
 - b . 児童・生徒の活動
- 3 . 反応 (event) = 教師の反応 / 児童の反応
 - a . 教師の反応
 - b . 児童・生徒の反応 {突発的な反応も含む}

各属性について、抽象的な基本型 (Type) を設定し、それに個に応じて要素を継承 (inherit) しているとする。(点線は略した部分を示す。)

授業構造

授業(object)





この構造を教師があらかじめ研究し、設定して授業に望む。しかし、この method や event は授業進行中の状況から突然、活動が生じることがあるので次の2点に分けられる。

- （ 静的(static)内容 ----- 事前準備・研究できるもの
- （ 動的(dynamic)内容 ----- 授業中に考え活動する method event、教材

3.3 教師の視点をとらえる授業継承研究

教師は事前に授業(object)を児童・生徒の「言語生活」の実態から判断し、さまざまな教育的配慮から設定する。田近洵一の「授業を成立せしめる前提条件」⁽⁴⁾を使い、これを説明すると、次のようになる。

継承する教師が、継承元の教師の次の視点から、以下の内容を確認する。

教師が以下の点を研究する

- 1 単元あるいは年間計画の中での位置
ア年間計画での位置 / イ単元での本時の位置 / ウ前後の時間との関連
- 2 学習者の実態
ア事前の学習者の実態把握 / イ学習者を取りまく状況 / ウ授業の正否と学習者の側面
- 3 教材の構造や教育的価値
ア教材の適切性 / イ教材の教育的価値 / ウ教材の不足点

- ・ 継承元の授業をした教師の視点から、その授業を考察する。
- ・ 継承先の教師が独自の視点で、その授業を研究する。(今までの授業研究の多く)

教授者と生徒が共通する言語環境にあるので、言語環境が異なる授業分析者地域の人にとっては、理解できない方法や内容が伴うことがある。そうなると、その言語環境を再構築して、授業を分析することになる。

3.4 授業記録に必要な項目

授業継承には、授業中の記録としてビデオで撮影することや、事前準備や事後反省などの教師の意見をまとめたものを記録する必要がある。それをもとに、継承者が研究するのである。実践報告・実践記録は授業継承しやすい方法で記録する必要があり、最低限次の項目が必要である。

1. 各属性の説明
2. 教師の言語観・教育観による属性の分析意識
3. 教師が設定する範囲と順序
4. 教師の方法の説明
5. 児童・生徒の反応
6. 教師の事前意識と自己分析

この中でも、すべての児童・生徒の反応については詳述することは難しいので、理解の度合いや活動の内容、特に記録すべきものなどを中心に複数の児童・生徒の反応を記録する必要がある。

3.5 継承の内容

1 継承の内容

継承とは、継承元の授業を分析することであるが、それは行われた活動をそのまま受け継ぐのではなく、その授業を構築した教師がどのような属性に対してどのような意識で方法・反応を検討したかを研究し、その研究の視点と、実際の授業の結果を考察し、これに付加・削除・変更を加えて、新たに対象とする児童・生徒などの属性を研究すること、そして、それをもとに、新しい構造体にするのである。そのために、国語教育の範囲（scope）と、それを基に対象の児童・生徒に適した順序（sequence）を設定することになる。国語教育において言語活動の全範囲から目標として抽出して「言語生活」としたように、実際に授業する対象の児童・生徒と、教材などのさまざまな状況から、目標を抽出して設定し、方法を工夫することとなる。

2 授業者からの視点を通しての研究

国語教育にはさまざまな授業が実践され、蓄積されてきている。それを検証し、その授業を継承することによって、国語教育の本質や新しい方向性が見えるはずである。よって、授業の歴史研究が必要となる。それは、現代の視点から授業研究することと、その当時の視点から、授業者の視点から授業研究すること、二つの視点が研究する必要がある。授業研究が授業者からの研究として存在するのではなく、継承者の視点からの研究ということも必要となる。

3 授業継承研究方法の入れ子構造

そして、授業研究の対象となる教師（甲）が、だれか（乙）の授業を継承したとする

と、その(甲)がどのような視点が(乙)を研究したかを検証し、そして、(乙)がどのように授業をしたかを検証することになる。つまり、授業継承研究は限界のない入れ子状態になっている構造を理解することになるのである。このように授業継承研究方法は視点を経緯して検証していく過程であり、特に国語教育では教材解釈を教師から検証する必要があり、その入れ子構造によって理解を難解にしていくことになりやすいのである。

授業継承研究方法の構造とは、教師の授業研究の意識の分析と、授業実態からの分析、教材の分析、空間的時局的状況の分析、そしてこれを継承する側の意識の分析によって成立するものである。

注

- (1)野地潤家『話しことば教育史研究』(1980年 共文社)
- (2)増田信一『音声言語教育実践史研究』(1994年 学芸図書) 231ページからの「音声言語教育実践史文献リスト」に音声言語指導実践の記録がある。
- (3)岩淵匡「言語生活研究の構想」(早稲田大学教育学部『学術研究』第42号 1994年)
- (4)田近洵一『現代国語教育への視角』(1982年 教育出版)

参考文献

- 野地潤家『話しことば教育史研究』(1980年 共文社)
 増田信一『音声言語教育実践史研究』(1994年 学芸図書)
 岩淵 匡「言語生活研究の構想」(早稲田大学教育学部『学術研究』第42号 1994年)
 桑原 隆『言語活動主義・言語生活主義の探究』(1998年 東洋館出版社)
 国語学会『国語学辞典』(1955年 東京堂出版)
 西尾 実『国語国文の教育』(1929年 古今書院)
 飛田多喜雄『国語教育方法論史』(1965年 明治図書)
 飛田多喜雄『続・国語教育方法論史』(1988年 明治図書)
 須田 実『戦後国語授業研究論史』(1997年 明治図書)
 宇佐美寛『国語科授業批判』(1986年 明治図書)
 井上尚美『国語の授業方法論』(1983年 一光社)
 稲垣忠彦『授業研究の歩み 1960-1995年』(1995年 評論社)
 輿水 実『国語科授業研究』「国語科教育学大系」第8巻(1975年 明治図書)
 砂沢喜代次編『授業研究の基礎理論』「講座授業研究」第1巻(1964年 明治図書)
 砂沢喜代次編『教材の系統と構造』「講座授業研究」第2巻(1964年 明治図書)
 広岡亮蔵『学習過程の最適化』(1972年 明治図書)
 広岡亮蔵『授業改造』(1964年 明治図書)
 広岡亮蔵『新授業改造』(1975年 明治図書)
 W・オコンノ細谷俊夫・大橋精夫訳『教授過程』(1959年 明治図書)
 重松鷹泰『授業分析の方法』(1961年 明治図書)
 木原健太郎『戦後授業研究論争史』(1992年 明治図書)
 N.ヴィルトノ浦昭二、国府方久史訳『アルゴリズムとデータ構造』(1990年 近代科学社)